

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 適用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				
外用鎮痛・消炎薬																				
抗 炎 成 分	インドメタシン 軟膏	インテパン 軟膏	鎮痛作用・抗 炎症作用を 有する。急性 炎症・慢性炎 症に対し強い 効力を示す。				0.1%~5%未 満(そう痒、発 赤、発疹) 0.1%未満 (ヒリヒリ感、 熱感、腫脹)				・本剤又は他のイ ンドメタシン製剤に 対して過敏症の既往 歴 ・アスピリン喘息又 はその既往歴(重 症喘息発作の誘 発)	・気管支喘息 ・感染を伴う炎症 ・妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮		妊婦又は妊娠し ている可能性の ある婦人に対し ては大量・広範 囲に渡る投与を さける 眼及び粘膜に使用 しない 表皮が欠損して いる場合に使用 すると一時的に しみる、ヒリヒリ 感 密封包帯法での 使用はしないこと	妊婦又は妊娠し ている可能性の ある婦人に対し ては広範囲に わたる長期 間の使用をさ ける		症状により、適量を1日数 回患部に塗布する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
	インドメタシン 貼付剤	カトレップ	鎮痛作用・抗 炎症作用を 有する。急性 炎症・慢性炎 症に対し強い 効力を示す。				0.1%~5% 未満(発赤、 そう痒、発 疹、かぶれ) 0.1%未満(ヒ リヒリ感、腫 脹)				本剤又は他のイ ンドメタシン製剤に 対して過敏症の既往 歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(重 症喘息発作の誘 発)	・気管支喘息 ・感染を伴う炎症 ・妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮		損傷皮膚及び粘 膜、湿疹又は発 疹の部位に使用 しないこと。		1日2回患部に貼付する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛	
	インドメタシン 外用液	インテパン 外用液	鎮痛作用・抗 炎症作用を 有する。急性 炎症・慢性炎 症に対し強い 効力を示す。				0.1%~5%未 満(そう痒、発 疹、発赤) 0.1%未満 (ヒリヒリ感、 熱感、乾燥 感、腫脹)				本剤又は他のイ ンドメタシン製剤に 対して過敏症の既往 歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(重 症喘息発作の誘 発)	・気管支喘息 ・感染を伴う炎症 ・妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮		妊婦又は妊娠し ている可能性の ある婦人に対し ては大量・広範 囲に渡る投与を さける 眼及び粘膜に使用 しない 表皮が欠損して いる場合に使用 すると一時的に しみる、ヒリヒリ 感 密封包帯法での 使用はしないこと	妊婦又は妊娠し ている可能性の ある婦人に対し ては広範囲に わたる長期 間の使用をさ ける		症状により、適量を1日数 回患部に塗布する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
	グリチルリチ ン酸	グリチルリチ ン酸ニカリ ウム点眼 のみ																		
	グリチルレチ ン酸	デルマクリン 軟膏	ステロイド様 抗炎症作用 (浮腫抑制、 肉芽腫抑制、 抗紅斑)				5%以上ある いは頻度不 明(過敏症)									眼科用として使 用しない。			通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布または 塗擦する。	湿疹、皮膚そう 痒症、神経皮 膚炎

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果						
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
ケトプロフェン	メナミン軟膏 後発品なし	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する		頻度不明・ア ナフィラク シー様症状、 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 0.1~5%未 満(局所の発 疹、発赤、そ う痒感、水 疱・びらん) 0.1%未満 (局所の腫 脹、適用部 の皮膚乾燥)	頻度不明(局 所の刺激感、 色素沈着) 0.1~5%未 満(局所の発 疹、発赤、腫 脹、そう痒 感、刺激感、 水疱・びら ん、色素沈 着) 0.1%未満 (局所の腫 脹、適用部 の皮膚乾燥)			本剤又は本剤の 成分に対して過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノフィブラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮	表皮が欠損して いる場合に使用 すると一時的に しみる、ヒリヒ リ感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包装法での 使用はしない			症状により適量を1日数回 患部に塗擦する。	下記の疾患なら びに症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱鞘炎、 腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛	
ケトプロフェン	モーラス(貼 付剤)	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する		0.1%未満(ア ナフィラク シー様症状、 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 5%未満、重 特例は頻度 不明(接触皮 膚炎) 頻度不明(光 線過敏症)	0.1~5%未 満(局所の発 疹、発赤、腫 脹、そう痒 感、刺激感、 水疱・びら ん、色素沈 着) 0.1%未満 (皮下出血)	頻度不明(過 敏症)		本剤又は本剤の 成分に対して過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノフィブラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法	横痃皮膚及び粘 膜、湿疹又は発 疹の部位に對 して刺激がある ので使用しないこと			1日2回患部に貼付する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱鞘炎、 腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛		
ケトプロフェン	セクターロー ション 後発品なし	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する		0.1%未満(ア ナフィラク シー様症状、 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 5%未満、重 特例は頻度 不明(接触皮 膚炎) 頻度不明(光 線過敏症)	0.1~5%未 満(局所の発 疹、発赤、腫 脹、そう痒 感、刺激感、 水疱・びら ん、色素沈 着) 0.1%未満 (適用部の皮 膚乾燥)			本剤又は本剤の 成分に対して過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノフィブラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法を考慮	表皮が欠損して いる場合に使用 すると一過性な 刺激感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包装法での 使用はしない			症状により、適量を1日数 回患部に塗布する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱鞘炎、 腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛		
サリチル酸グリコール	配合のみ																
サリチル酸メチル	サリチル酸 メチル「ミヤ ザワ」 後発品なし					過敏症		本剤過敏症の既 往歴					眼には使用しな い。大量使用に よる頭痛、悪心・ 嘔吐、食欲不 振、頻脈			5%又はそれ以上の濃度 の液剤、軟膏剤又はリニ メント剤として皮膚局所に塗 布する	下記における 鎮痛・消炎 関節痛、筋肉 痛、打撲、捻挫

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）	G 使用方法（誤使用のおそれ）	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 （投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する（適応を 誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌（他 剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
ピロキシカム 軟膏	ナバゲルン 軟膏	アラキドン酸 代謝における シクロオキシ ゲナーゼを阻 害し、炎症・ 疼痛に関与 するプロスタ グランジンの 生成を抑制 することによ るものと考え られている。抗 炎症作用、鎮 痛作用を有す る。					本剤の成分過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴（喘 息発作の誘発）	感染を伴う炎症 に用いる 場合には感 染症不顕性	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患（変 形性関節症） では薬物療 法以外の療 法	表皮が損傷して いる場合に使用 すると一過性の 刺激感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包装法での 使用しない		本品の適量を1日数回患 部に塗擦する。 高齢者には必要最小限の 使用にとどめる	下記疾患並び に症状の消 炎・鎮痛 変形性関節症 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎 （テニス肘等） 筋肉痛（筋・筋 膜炎等） 外傷後の腫 脹・疼痛	
フェルピナク 軟膏	ナバゲルン 軟膏	プロスタグラ ン生成抑制作用 を有し、疼痛、 急性炎症、慢 性炎症に対し、 鎮痛・抗 炎症作用を示 す。					本剤の成分過敏 症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴（発 作の誘発）	感染を伴う炎症 に用いる 場合には感 染症不顕性	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患（変 形性関節症） では薬物療 法以外の療 法	表皮が損傷して いる場合に使用 すると一過性の 刺激感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包装法での 使用しない		症状により、適量を1日数 回患部に塗擦する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節症 筋・筋膜炎 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎 （テニス肘等） 筋肉痛 外傷後の腫 脹・疼痛	
フェルピナク 貼付剤	セルタッチ	プロスタグラ ン生成抑制作用 を有し、疼痛、 急性炎症、慢 性炎症に対し、 鎮痛・抗 炎症作用を示 す。					本剤又は他のフェ ルピナク製剤に 対して過敏症の 既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴（喘 息発作の誘発）	感染を伴う炎症 に用いる 場合には感 染症不顕性	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患（変 形性関節症） では薬物療 法以外の療 法	損傷皮膚及び粘 膜、湿疹又は発 疹の部位に 対して使用しないこと		1日2回患部に貼付する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節症 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎 （テニス肘等） 筋肉痛 外傷後の腫 脹・疼痛	
フェルピナク ローション	ナバゲルン ローション	プロスタグラ ン生成抑制作用 を有し、疼痛、 急性炎症、慢 性炎症に対し、 鎮痛・抗 炎症作用を示 す。					本剤の成分に対し 過敏症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴（発 作の誘発）	感染を伴う炎症 に用いる 場合には感 染症不顕性	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患（変 形性関節症） では薬物療 法以外の療 法	表皮が損傷して いる場合に使用 すると一過性の 刺激感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包装法での 使用しない		症状により、適量を1日数 回患部に塗擦する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節症 筋・筋膜炎 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 上腕骨上顆炎 （テニス肘等） 筋肉痛 外傷後の腫 脹・疼痛	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ 化に伴う使 用環境の変 化
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
局所 刺激 成分	カンフル	カンフル精 後発品の添 付文書を用 いた	カンフル局所刺 激作用を有 し、皮膚に塗 布すると発赤 又は冷感を生 じる					頻度不明(過 敏症)						湿潤面へは使用 しない 眼又は眼の周囲 には使用しない		患部に適量を塗布あるいは 塗擦する。	下記疾患にお ける局所刺 激、血行の改 善、消炎、鎮 痛、鎮痒 筋肉痛、挫傷、 打撲、捻挫、凍 傷(第1度)、凍 瘡、皮膚そう痒 症	
	テレピン油	なし																
	ハッカ油	内服のみ																
	メントール	内服のみ																
	ユーカリ油	保険薬辞典 にはきよう み、きよう しゅう、着色 用のみある が添付文書 なし																
	トウガラシエ キス	トウガラシチ ンキ エキスがな かったため チンキで代 用をした 後発品なし						頻度不明(刺 激感、疼痛)		び爛、創傷皮膚及 び粘膜炎				原液で使用しな い、入浴直後の 使用は避ける 眼又は眼の周囲 には使用しない		①通常、トウガラシチンキ として、10~40%を添加した 液剤、軟膏剤、硬膏剤又は パップ剤を1日1~数回 局所に塗布する。 ②通常、トウガラシチンキ として、1~4%を添加した 液剤を1日1~数回局所に 塗擦する。	皮膚刺激剤と して下記に用 いる。 ①筋肉痛、凍 瘡、凍傷(第1 度) ②育毛	
	ノニルワニリ ルアミド	なし																
抗 ヒスタ ミン 成分	ジフェニルイ ミダゾール	なし																
	ジフェンヒドラ ミン	レスタミン コーワ軟膏	アレルゲン を塗布または 皮内注射した ときに起こる 発赤、膨疹、 そう痒などの アレルギー性 皮膚反応は、 本剤の1回塗 布により著明 に抑制される。					頻度不明(過 敏症)						炎症症状が 強い渗出性 の皮膚炎：過 剰な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用す る。	使用部位：眼の まわりに使用 しない。	通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害 の再発・悪化のお それ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用量に上 限があるもの				過量使用・誤使 用のおそれ
	外用がない のでボララ ミン錠2mgを 使用	抗ヒスタミン 作用		中枢神経抑制剤・アルコ ール・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキシドパ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇)	痙攣・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	5%以上又は 頻度不明(鎮 静、神経過 敏、頭痛、焦 燥感、複視、 眠気、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、痙 攣、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渇、胸 やけ、食欲不 振、悪心、嘔 吐、腹痛、便 秘、下痢、頻 尿、排尿困 難、尿閉等低 血圧、心悸亢 進、頻脈、期 外収縮、鼻及 び気道の乾 燥、気管分泌 液の粘性化、 喘鳴、鼻閉、 溶血性貧血、 肝機能障害 (AST(GOT)・ ALT(GPT)・ ALPの上昇 等)、悪寒、 発汗異常、疲 労感、胸痛、 月経異常、 0.1%未満 (血小板減 少)、自動車の 運転等危 険を伴う機械 の操作		本剤の成分又は 類似化合物に対し 過敏症の既往歴、 緑内障(増悪)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(増悪)、低出生 体重児・新生児(痙 攣等の重篤な反応 があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状 腺機能亢進症、狭 窄性消化性潰瘍、 幽門十二指腸通過 障害、循環器系疾 患、高血圧症、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	用法用量	効能効果	
	外用がない のでボララ ミン錠2mgを 使用	抗ヒスタミン 作用		中枢神経抑制剤・アルコ ール・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキシドパ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇)	痙攣・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	5%以上又は 頻度不明(鎮 静、神経過 敏、頭痛、焦 燥感、複視、 眠気、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、痙 攣、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渇、胸 やけ、食欲不 振、悪心、嘔 吐、腹痛、便 秘、下痢、頻 尿、排尿困 難、尿閉等低 血圧、心悸亢 進、頻脈、期 外収縮、鼻及 び気道の乾 燥、気管分泌 液の粘性化、 喘鳴、鼻閉、 溶血性貧血、 肝機能障害 (AST(GOT)・ ALT(GPT)・ ALPの上昇 等)、悪寒、 発汗異常、疲 労感、胸痛、 月経異常、 0.1%未満 (血小板減 少)、自動車の 運転等危 険を伴う機械 の操作		本剤の成分又は 類似化合物に対し 過敏症の既往歴、 緑内障(増悪)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(増悪)、低出生 体重児・新生児(痙 攣等の重篤な反応 があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状 腺機能亢進症、狭 窄性消化性潰瘍、 幽門十二指腸通過 障害、循環器系疾 患、高血圧症、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	用法用量	効能効果	
血 行 改 善 薬	酢酸トコフェ ロール	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。					0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)									錠 剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、静脈血栓 症、糖尿病 性網膜症、凍
	ニコチン酸ベ ンジル	配合のみ																
外用湿疹・皮膚炎薬																		

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
ステロイド 抗炎症成分	吉草酸酢酸 プレドニゾン	リドメックス コーワ軟膏・ クリーム・ ローション	局所抗炎症 作用、血管収 縮作用(軟 膏・クリーム、 ローションとも 同等の作用)	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	・(眼瞼皮膚 への使用時) 眼圧亢進、緑 内障、白内障 ・(大量又は 長期にわた る広範囲の 使用、密封法 -ODT使用 時)緑内障、 白内障等	軟膏：刺激感 0.17%、毛のう 炎・せつ 0.08%、そう痒 感0.07%、皮 疹の増悪 0.07%、カンジ ダ症0.01%な ど クリーム：刺 激感0.24%、 毛のう炎・せ つ0.21%、皮 疹の増悪 0.21%、そう痒 感0.05%、白 癬症0.03% ローション：1 例(0.09%)に 白癬、皮膚の 真菌症、細菌 感染症及び ウイルス感染 症(密封法- ODTの場合、 起こり易い。) ・長期運用： ざ瘡様発疹、 酒さ様皮膚 炎、口囲皮膚 炎、ステロイ ド皮膚、多毛 及び色素脱 失等、ときに 魚鱗屑様皮 膚変化、一過 性の刺激感、 乾燥 ・(大量又は 長期にわた る広範囲の 使用、密封法 -ODT使用 時)下垂体・ 副腎皮質系 機能の抑制	過敏症	細菌・真菌・スピロ ヘータ・ウイルス皮 膚感染症及び動 物性皮膚疾患(疥 癬、けじらみ等) 〔感染症悪化〕、本 剤の成分に対し過 敏症の既往歴、鼓 膜に穿孔のある湿 疹性外耳道炎〔穿 孔部位の治療の 遅延及び感染の 恐れ〕、潰瘍(ペー チエット病を除く)、 第2度深在性以上 の熱傷・凍傷(治 癒の遅延)、原則 禁忌：皮膚感染を 伴う湿疹・皮膚炎 ・高齢者・妊婦及 び妊娠の可能性 がある婦人・小児 への大量又は長 期にわたる広範囲 の使用を避けるこ と。	おむつ使用	皮膚感染を 伴う湿疹・皮 膚炎に使用 しないこと(適 切な抗菌剤 による治療が 併用)。	使用量に上 限があるもの	使用部位：眼科 ・大量又は長 期にわたる 広範囲の密 封法(ODT) 等の使用に より、副腎皮 質ステロイ ド剤を全身的 投与した場 合と同様な症 状があらわ れることがある。 ・長期運 用により、ざ 瘡様発疹、酒 さ様皮膚炎、 口囲皮膚炎 (ほほ、口圍 等に潮紅、丘 疹、膿疱、毛 細血管拡張 を生じる)、ス テロイド皮膚 (皮膚萎縮、 毛細血管拡 張、紫斑)、 多毛及び色 素脱失等が あらわれるこ とがある。ま た、ときに魚 鱗屑様皮膚 変化、一過性 の刺激感、乾 燥があらわ れることがある。 ・大量又 は長期にわ たる広範囲 の使用、密封 法(ODT)に より、下垂 体・副腎皮質 系機能の抑 制、緑内障、 白内障等	通常1日1~数回、適量を 患部に塗布する。なお、症 状により適宜増減する。ま た、症状により密封法を行 う。	湿疹・皮膚炎 群(進行性指 掌角皮症、ピ ダラル菌癬を 含む)、 痒疹群(固定じ ん麻疹、スト ロフルスを含 む)、 虫さされ、乾 癬、掌蹠膿疱 症
	酢酸プレド ニゾン	外用はなし (眼軟膏は あり)													